

医療法人社団東山会 調布東山病院

【基本情報】(2018年度)

・病床数: 83床 ・入院料: 急性期一般
入院料1 ・看護職員数: 138人/うち外
来の看護職員数: 17人 ・外来患者数:
333人/日

地域包括ケアシステムが推進される中、地域で療養する人々の治療と暮らしを支える外来医療の役割が、ますます大きくなっている。外来の看護職は、医療と生活の両方の視点で、一人一人のライフスタイルに合わせた療養指導や専門的支援を行えるのが強みだ。本連載では、重症化予防や機能回復に向け、疾患を持ちながら地域で暮らす人々を支える外来での看護の役割を、事例を通して紹介する(全3回)。

医療法人社団東山会が運営する、調布東山病院。2次救急医療機関であるとともに、透析医療とドック・健診センターでの予防医療に力を入れており、同法人の訪問看護ステーションや居宅介護支援事業所と連携した在宅医療にも取り組んでいる。福地洋子副院長・看護部長は、自院の役割について「地域住民が安心して最期まで暮らしていくための『生活支援型急性期病院』を目指しています」と話す。

気になる患者を支える仕組みづくりを

地域に根差した医療を提供する中で、同院では、病院が病気を治すだけでなく入退院前後の

生活を支える視点を持つことが重要だと考え、在宅療養支援に取り組み始めた。認定看護師による看護専門外来のほか、一般外来の看護師による相談外来の機能を強化。外来の看護師が、その人の生活面での課題も含め、地域で療養が続けられるようサポートする。

金子イト子外来科長は「外来の看護師は、問診室や救急、診察室、中央処置室など、日々、配置が変わります。当直も行っており、各所で互いに気になる患者がいれば情報共有しています」と説明する。外来の医師向けにも在宅療養支援の対象者をスクリーニングするための資料を作成し、外来診療の際に「ちょっと気になること」を看護師に知らせてもらうようアピールしている。

外来では、支援を行う際の基準として独自のチェック項目を用意している。「認知症・独居」「高齢世帯」などの本人属性や、病状管理の必要性などの医療面、セルフケア能力、倫理的な問題を含むケースかどうかなどを確認し、1つでもチェックが付けば検討を始める。患者本人や家族との面談で意向を確認し、支援方法を外来内のチームで相談。チェック項目や対応のフロー図を使うことで、看護師間のスキルギャップを埋めながら、漏れがないよう患者を支えていく仕組みを築いている。

地域とつながり複合的な課題に対応

経済・家庭・生活面など複合的な課題を抱える事例に対しては、地域包括支援センターのケアマネジャーや医師とともにカンファレンスを行う。「医学的適応」「患者の意向」「QOL」「周囲の状況」など、患者の意思や症状、支援体制などを総合的に勘案し、方策を検討する。

がんの手術を控えた認知症高齢者のケースでは、生活面で気がかりなことを外来診察時に看



外来の看護師、医師、ケアマネジャーなどで定期的な事例を検討する

護師が感じ取り、ケアマネジャーとも情報共有。家庭環境や療養上の課題などをアセスメントし、入院前から地域のかかりつけ医との連携や訪問看護ステーションの選定を行って、安心して地域に戻れる体制を整えた。

受診が中断しがちで生活環境に課題がある糖尿病患者の場合は、外来で、地域包括支援センターや行政との多職種カンファレンスを実施。その後、入院となったが、本人の希望も尊重しながら、自宅に戻るための関係者間の合意形成やケアマネジャーの選定、サービスの検討、自宅の受け入れ準備などを行った。

外来の看護師、山澤明子さんは「課題があったとしても、これまでの生活史を認め、患者や家族をエンパワーメントするような支援をしていきたい」と語る。金子外来科長も、通院患者への在宅療養支援を行うことで、患者や家族の不安を取り除くとともに「定期的・継続的に関わることで症状の悪化を防ぎ、入院したとしても計画的な入院にすることができるのでは」と考えている。

病気を抱えた人が、地域で自分らしく暮らすために——。同院の看護師の取り組みが、きょうも住民を支えている。